

北

北海道へは、日本海側を北上する形で五日間かけて入った。金沢には、中学校の同級生がいたの
で、そこで一日泊めてもらった。予備校生とその家族
にとつて大事な一日を邪魔されるのだからさぞかし迷
惑な話だったろうが、そんな気遣いができるようにな
るのはずっとずっと先の話だ。

洗濯してあげるから、と同級生のお母さんに言われ
るまま、それまで二日分の下着やTシャツを差し出し
た。翌日、きれいに畳まれたそれらを受け取ったが、
洗濯機の中が真っ黒になった、と笑われた。汗の汚れ
ももちろんだが、一日中排気ガスを浴び続けた結果で
ある。今でこそ見ないが、四十年前のトラックと言え
ば、黒々とした排気ガスをふんだんにまき散らしてい
た。上り坂ともなれば目の前がすすむほどだった。中
には大きくよけてくれるトラックもあった。排ガスを
浴びせるには忍びないと考えてくれたのかもしれない
のだが、そんな善意にとれるようになるのはこれまた
ずっとずっと先の話で、

「ぼくがそんなに邪魔か。」
と一人毒づいたりしていた。

同級生は受験勉強を一休みし、金沢の町を案内して
くれた。晩ご飯をごちそうになった後は、お気に入り
のレコードをかけてもてなしてくれたのだが、当主人

気のあつた喜多郎のアルバムだったので、何度つつか
れてもすぐに眠ってしまった。

その前日、旅の初日は敦賀で日が暮れた。勘を頼り
に国道沿いの小さな集落に下り、何軒か泊めてくれる
ところを訪ね歩いた。また雨が降ってきた。

「区長さんに聞いてよ。」

だれも決めかねるようで、言われるまま区長を訪ね
て頼んでみた。少し先のお堂ならだれもいないからい
いだろうと言ってくれた。

電気もなく真っ暗な社殿に懐中電灯を頼りに寝袋を
敷いた。これも今思えばではあるが、梅雨明け前だつ
たらしく、出発直後から雨に降られていた。旅の最初
から最後まで気象情報を一切気にしなかったのだが、
それは単に発想がなかっただけのことだ。

社殿に転がり込むのと同じ時に、一気に雨脚が強くな
り、遠雷も徐々に音量が増していった。やがてフラッ
シュをたたいたように堂内が明るくなったかと思うと耳
をつんざくような雷鳴がどろいた。天井をぐるりと
囲む彩色の地獄絵が見えた。稲妻は何度か堂内をほの
白く浮かび上がらせた。こんな趣向で絵画を鑑賞でき
たのもどんなに幸運なことであつたかと、今では神仏
に感謝するのだが、もちろんそのときは生きた心地も
せず、翌朝まだ暗いうちに敦賀を後にした。



専門ババ奮闘記(その2) 61

木幡智恵美

虫捕り (8)

「母さん、来て」という長男に付いて、家の裏に近づくに連れ、忍び足になつて
いく。「見て」と指さす方を見ると、壁に白い物体が。羽化したてのセミだ。見ているうち
に、白地に薄緑色の筋が浮かんできた。生まれて初めて見る、セミの羽化だった。

同じ頃だから、長男が小学校の低学年だったと思う。飼っていたスズムシの羽化も見るこ
とができた。何度も脱皮し、最後に羽化する際は真っ白。これも、「母さん、ほら、羽化しちよ
う」の長男に声に導かれて見たものだった。

虫には全く興味がなかったもので、知らないことが多かった。虫好きの長男に付き合わされる
ことで、いろいろ教わった。トノサマバツタの産卵現場もだ。飛行場にバツタ探しに行つてい
た時、長男が見つけたのだ。少し離れたところで見ていると、お尻をぐつと曲げて土の
中に埋めている。この時は、トノサマバツタが長男に産卵を見せるために誘っているのではな
いかと思つたほどだ。

虫にまつわるいくつかの感動を得ていたせいか、孫たちにも、特に虫に興味がある寛大に、
私が得たものを伝えたかった。キアゲハの羽化もそうだ。最初にあげた幼虫は、小さいうちに
死んでしまったので、今度は微かに縞模様が出てきた幼虫を持つて行つた。ところが、その幼
虫も非業な最期を遂げることになった。掃除をするために、炎天下、外に出されたまま放置さ
れ、熱中症(?)で敢え無く昇天してしまつたそうだ。結局、我が家で育て、うちに来る時に
見せようと、下駄箱の上に幼虫を入れた透明プラスチックを置いた。黄緑と黒の縞々になり、
どんだん太り、やがて動かなくなつた。蛹になつたのだ。「二週間くらいで羽化するからね。
見られるといいね」と言っていたら、十二日目の朝、蛹のお尻の部分がぶるぶると震えてい
る。用事を済ませて見に来ると、もう蝶になつて下駄箱の上を這うように動いていた。夫がす
ぐに動画を撮り、娘に送つた。羽化の現場を見せてやれないのは残念だったが、蝶になつた場
面は見せてやれた。

「忠ちゃんね、芋虫類は苦手なんだって」と、後になって娘から聞いた。誰もが虫好きとは限
らない。現に、小さい頃は長男に付いて虫捕りしていた二男は、今やコバエが飛んでも、「お
袋、何とかして」だ。ゴキブリが出てこようものなら、「キヤー！」と絶叫する始末である。

30代フリーター やあ、ジイさん。政府がコロナ感染を抑えるため、酒の提供の自粛要請に応じない飲食店に対し、取引のある金融機関や酒の販売業者を通じて働きかけを強めようとして、業界団体などから抗議を受け、世論の逆風を懸念する与党からも反対されて撤回に追い込まれた、と報じられている（7月14日朝日新聞朝刊）。コロナ担当相の西村康稔に辞任要求も出ている。

年金生活者 医師会、病院業界、医療専門家、医薬品・医療機器メーカーなどをひとまとめにして「医療権力」と呼ぶなら、その強さは法による「強制」によらなくても、「自粛」の「要請」で国民の行動を左右し得ることをコロナはあらわにした。「要請」に従わない場合は「自粛警察」が強制力の発動を代行した。

金融機関や酒販業者を通じた飲食店への働きかけは特措法にも書いてない「要請」であり、超法規的な「脅し」に等しい。なぜ「医療権力」がからむ

年金 「医療権力」とそれを支持する国民世論に押された結果といえる。飲食業界、とりわけ酒を出す店に犠牲を強いたのは、それによって生活に困る国民の比率が世論の大勢を左右するほど多くないからだ。

30代 マスメディアはどちらかということと医療の専門家の言うことに政権が耳を傾けないといったとらえ方だ。「医療権力」という言い方は極端なんじゃないか。

年金 「医療権力」はコロナ対策をめぐって終始、政府、与党の「政治権力」より優位に立ち、それを動かしてきた。そして野党は自ら進んでこの権力に追従した。永田町はことコロナに關する限り「医療権力」の支配下に置かれたということができる。

五輪の無観客開催という前代未聞の事態は「医療権力」の強さを象徴する。患者はひとりも死なせてはならず、病気は治さなければならぬというのがこの権力の行動原理であり、医療にはそれができるかのように振る舞

と、こうもやすやすと法の支配からの逸脱が起こるのか。それだけこの権力が強いからであり、その強さは国民の「信仰」といつていいほどの「信頼」に支えられている。ここで言う「信仰」とは、自然法則によって決まる人の生死をあたかも医療が決めるかのような思い込みを指す。

諸外国でも大なり小なり医療への「信仰」があるなかで、日本のそれは強いほうだと推定される。それが欧米のような「強制」ではなく「要請」で国民の行動を規制できた最大の要因だ。だが、コロナは同時にそうした「信仰」を相対化もした。「自粛」の長期化の不自然さに人びとの心身はおのずと拒否反応を起こし始めている。それが繁華街での人出の回復となってあらわれている。

30代 東京に出された4度目の緊急事態宣言は、五輪開催のための宣言となった。感染抑制の実効性よりも「安全安心」な五輪をアピールする効果を菅政権は期待しているのだろう。

う。おおかたの国民はそれを信じ、頼りにし、それがこの権力の強さの源泉となつていく。

医療がどんなに踏ん張つても、人間は必ず死ぬし、治らない病気はいくらでもある。それを承知でこの権力は死者ゼロ、病気ゼロを目指して行動することをやめない。それが自らの存在理

年金 宣言は世論の求める無観客の根拠にも利用された。チケット購入者や旅行業界からの不満を多少とも抑えることができる。コロナのわずかな感染拡大も許さない医師会や病院業界、専門家などの「医療権力」に政府、与党の「政治権力」が打ち負かされた証しとして東京五輪は開かれることになった。

たしかに東京都の感染者はまた増え始めている。だが、死者は減少傾向にあり、重症者も確保病床約400床に対して50人台にとどまり（東京都HP、7月14日更新）、医療逼迫が差し迫っているわけでもない。

菅義偉らは五輪を有観客で開催しても爆発的な感染拡大には至らず、医療が逼迫することもない、と見込んでいたに違いない。それにワクチンの効果も加わる。新型コロナは日本では高齢者や基礎疾患のある患者を除けば風邪と変わらないという本音がそのベースになつていと推察される。

30代 それでもまた緊急事態宣言を出し、無観客に甘んじることにした。

由だからだ。コロナへの対処の仕方もあるの延長線上にある。口ではそう言わないが、振る舞い方はゼロコロナを目標にしており、ひとりでも感染者を増やさないことを至上命令としている。

そのために国民に強いたのが「自粛」であり、そのさいの脅し文句が「医療崩壊」にほかならない。ウイルスを人為的にコントロールすることはできないのだから、感染が拡大することを当然の前提として、「崩壊」しない医療供給体制をつくる努力は今に至つてもなされていかない。その果てに行き着いたのが無観客五輪だ。

30代 見ようによつてはウィズコロナの五輪にも見える。

年金 バブル方式も無観客も、目指しているのはコロナの排除だ。そんな「ゼロコロナ」思想に囚われた対策を続ける限り、コロナ禍の終息はない。ウイルスの撲滅など不可能であり、感染の拡大と縮小の反復を人為的に止めることができないことはこの1年半で実証されている。

ニュース日記 793
中村 礼治

コロナは消えない